

ソーシャルデザインシンキングとMOD - その5

大震災はデザインを変える

Social Design Thinking and MOD-5, The Great Earthquake Change the design

(キーワード: MOD, デザイン, マネジメントデザイン, 感性, プラグマティズム)

(KEYWORDS: MOD, Design, Management Design, Kansei, Pragmatism)

○和田精二 (湘南工科大学)

1. はじめに

大震災後、被災地のために各地のデザイン団体が、独自に義援金募集、仮設空間設営、防災サイン提案、安否確認支援等の活動を行った。デザイン学会でも特別セッションが企画され、デザイン専門誌も関連記事を掲載した。デザインを施していない商品を探すのに苦労するほどデザインが社会に定着したことは大変目度いことだが、今回の大震災が今後のエネルギー政策や消費者意識に影響することが必至であるとするれば、生活の進歩、発展を前提とした楽観的未来像を描いてきたデザイナーにとって意識の転換を強いられる時代の到来と思える。「大震災はデザインを変える」と大胆に銘打ったが、ここで述べたいことは、デザインが自ら変わらなくとも国民の意識が変わればデザインも変わるから、結果的に大震災を契機にデザインは徐々に変わると予測できる、とすることである。

2. 大震災が教えてくれたこと

大震災後、一般誌や書籍を中心に様々な分野の識者が大震災について語っている文章にデザイン視点で目を通した。特に気になったのは以下の3点である。1番目は津波によって壊滅状態となった岩手・宮城・福島県の沿岸部の復興、2番目は福島第1原発事故が引き起こした今後のエネルギー問題、3番目は、上記を踏まえたデザインの今後についてである。

1番目の問題は被災したエリアの広さや被害の甚大さを考えただけで思考停止状態に陥るため、参考例として、阪神淡路大震災後の町づくりで失敗したと言われる神戸市の例を紹介したい。阪神淡路大震災後、10兆円の公共事業が計画されたが、その予算を県庁や市役所が仕切ったためユニークな企てが不可能となり、昔からの県の規則と担当者の型どおりの思考による公共施設が建ち並び、個性のない普通の町になってしまった。復旧(生活再建)でなくハコモノ中心の復興計画とも揶揄されている。繁華街が消え神戸らしさがどこにもない。この事例は、行政に対するMODの問題に繋がっていく。2番目は、福島第1原発問題である。政府が情報を小出しに加工して伝えたため、何が真実なのか混乱させられたが、背後に様々な事実が垣間見える。一般国民は原発を含む電力のような国家的インフラは国の公正な監督の元で正当に行われてきたものと信じて来たが、その信頼感が崩れ去った。億単位の研究費を得ることで成立する

産学連携の不自然さは誰の目にも面妖に映る。放射線の安全基準の数値が専門家により異なるのは国民の不安を増長しているが、閾値の問題は識者によって異なる恐怖心という感覚差も関係しているようである。イデオロギーが介在するとさらに真実が見えなくなる。有事を想定しない原発の設計基準も受け入れ難いが、理論やデータに偏して周辺住民の精神構造に全く配慮しない専門家のリアリティの欠如も露呈した。一方、地震、台風、豪雨、豪雪等の厳しい自然条件と、大都市が全て河口部の軟弱地盤上に立地する国土であることも有事を再認識する機会となった。加えて原発問題で明らかになったように、国が国民を守ってくれないことを知ったのも今回の教訓である。贅沢三昧の何不自由ない暮らしに至福感すら感じなかった大震災前の国民が、安全な文明などありはしないことを悟った以上、徐々に意識変革していくことは想像に難くない。

3. まとめ

今回の大震災では、リアリティのない政治家への失望とは別に、日本企業、日本社会全体の強みが依然圧倒的に現場力に支えられていることが証明された。被災した主要3県が日本のGDPに占める比率は合計4%に過ぎないが、自動車用、電機用の部材生産が止まったとたん海外メーカーに至るまでダメージが波及し、東北の部品メーカーが世界を動かしていたことが判明した。東北の技術力が高い理由は分厚い下請け層が親会社の近場にあることと人材のレベルにあり、まさに現場力と言える。

冒頭に述べた被災後のデザイン団体の現地支援活動の中にデザイナーが有するプラグマチズムを感じる。口先だけの言葉に被災地の人々は感動しない。こうした、ありのままの現実を凝視し、行動しながら現実を深く見つめ、未来を洞察する行動がこれからのデザインの運命を決定する。日本のデザイナーの6割が企業内で活動しているが、これからは、政治と経済がますます不可分の関係になる。企業内デザイナーもその立ち位置を再考する機会となる。自分で自分を守ることを選んだ市民感覚は行動となって現れるからそれをキャッチするには生活者を観察するために現場に出ることだろう。デザインは権力に擦り寄らず、生活者に擦り寄るべき職能である。